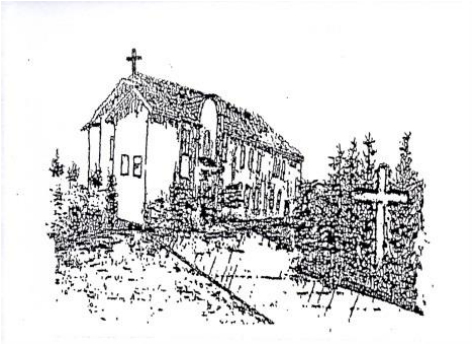

月 報

№.４３７
２０１６年
１０月

日本キリスト教団
茅　ケ　崎　香　川　教　会
茅ヶ崎市香川1丁目 34－35
http://kagawachurch.jimdo.com/

説教 『 霊が吹き込まれると生き返る 』

エゼキエル書 ３７章１節～１４節　　小河信一 牧師

９月は、主日礼拝の説教を通じ、2016年度の教会標語「世代から世代へ、信仰から信仰へ」について学んでいます。教会標語に伴う聖句としては、ヨエル書3:1が掲げられています。

ヨエル書3:1――

その後

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。

〈すると / and〉あなたたちの息子や娘は預言し

老人は夢を見、若者は幻を見る。

本日は、この中の「若者は幻を見る」に関し、エゼキエル書37章に照らし合わせながら、「幻を見る」ことについて考えてみましょう。

皆さんは、「幻を見る」ことを、どのように理解されているでしょうか？

聖書信仰に即して言えば、神が人間に見させてくださるのが、「幻」ですから、人間の側に幻を見るという神秘性や霊感が備わっているかどうか、という議論を先行させてはなりません。

きっと、神はその御心に従って、あらゆる時空の機会を捉えながら、人間にさまざまな幻を示されることでしょう。旧新約に刻まれている、いろいろな人間の幻体験は、そのことの証しです（例：ダニエル書5章、使徒言行録10:1-33）。

そうした中で、エゼキエル書37章「枯れた骨の谷」の幻は、ヨエル書3

章及び使徒言行録2章と響き合っています。つまり、「幻」の形で預言者エゼキエルに示されたことが、ヨエル書3章に受け継がれ、そして、使徒言行録2章・聖霊降臨日において実現したことが確かめられます。

その点で、旧新約聖書に数ある幻の出来事の中でも、「枯れた骨の谷」は**幻の教科書・典型**と呼べるでしょう。このような幻こそを、「神さま、見させてください」と、私たちが祈り求めるに値するものです。エゼキエルの見た幻は、奇っ怪でありながらも、壮大であり救いに満ちています。参考までに言えば、37章に「幻」という言葉は出ていませんが、「幻」（マルアー 原意 見る）はエゼキエル書の鍵語の一つです（1:1、8:3、40:2、43:3）。

エゼキエル書37:1――

主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。

初めに、「主の手がわたしの上に臨んだ」と書かれています。先に、幻というのは、神が人間に見させられるものだと言ったのは、このことです。それは、神の御心に拠るものなので、人間の側からすれば、それは突然起こります。神の御力は、現実の只中にいる人間を引きはがすかのように、霊的な世界へと誘います。「わたしは主の霊によって連れ出され（＝引き回されて）」という句（参照：ルカ4:1、使徒言行録8:39）は、その間の事情を物語っています。

主の手は、バビロンにある捕囚民の居住区から、ひとりエゼキエルを引き上げ、どこか近くの平地または谷間に降ろしました。今、霊的な世界へと言いましたが、そこは、楽園ではなく、思いがけないことに「骨でいっぱい」の場所でした。エゼキエルにとっては、死んだ人の骨がゴロゴロ転がっている薄気味悪い光景だったことでしょう。なおかつ、その骨は「甚だしく枯れ」（いたく枯れ果てて）いました。主イエスが「霊によって引き回され」て行ったのも、荒れ野でした（ルカ4:1）。そこで、主イエスは断食し、飢え渇きを覚えられたのです。

「主の手が臨んだ。主の霊によって連れ出された」というのが、エゼキエルが幻を見る事の発端でした。そこで、私たちの教会の今年度の歩みに沿って言えば、私たちを「連れ出し引き回す」ほどの、この霊の激しい働きがあるかどうか、あるいは、聖霊の降臨を熱心に祈り求めているかどうか、が問われています。自分で「幻を見られるか見られないか」結論づけ

るのではなく、「わたし（主）はすべての人にわが霊を注ぐ。〈すると〉若者は幻を見る」ことを待望することが大切です。

ところで、「そこは骨でいっぱい」または「それらはいたく枯れ果てていた」というのは、当時のユダヤ人の共同体の有り様を暗示していました。

前598年、エゼキエルは、当時の南ユダ王国の王と共に、バビロンへ捕囚民として送られました。川のほとりに（詩編137:1-2）、捕囚民の居住地がありました。故郷のエルサレムにいた時のように、もはや神殿で礼拝することは出来ませんでした。そこで、ユダヤ人の霊的指導者は、会堂（シナゴーグ）を作り（参照：詩編74:8、エゼキエル書11:16）、礼拝を守り信仰を継承したと言われています。

枯れた骨という比喩については、さまざまな解釈があることを承知の上で、私見を述べます。後段のエゼキエル書37:11にあるように、「これらの骨はイスラエルの全家です」。つまり、捕囚に連れて来られたユダヤ人の礼拝共同体を指しています。そして、彼らが「いたく枯れ果てて」とは、言い換えるなら、彼らが信仰上、「熱くも冷たくもなく、なまぬるい」状態（ヨハネ黙示録3:16）に陥っていたということではないでしょうか。ユダヤからバビロンへ引っ越して来て、意外にも生活しやすいではないかという空気があったかもしれません。そのことがかえって災いし、信仰と日常の生活にゆるみを出て来たのではないかと思われます。あるいは一部には、神に反逆し、神信仰を捨てたので、骨まで干からびて「死んでしまった」状態の人々もいたでしょうか。

実際にユダヤ人の礼拝共同体が、信じてはいたけれども行いが伴わなかった、また、言葉や口先だけの信仰になっていた（Ｉヨハネ3:18）とすれば、それは遠い昔話ではないでしょう。今日、私たちの教会もまた、「いたく枯れ果てて」はいないか、という疑問が差し出されている、私たちに関わりのある出来事であり、幻です。

さて、前回のエゼキエル書36:22-32の説教の中では、罪により汚れ、忌まわしいものに引かれているイスラエルに対し、神が一方的に「新しい心と新しい霊」を与えるということが説き明かされました。その際、より具体的に、神の御心と御業を知る手がかりとして、36:24の三つの動詞に注目しました。

エゼキエル書36:24――

わたし（主なる神）はお前たちを国々の間から①取り、すべての地から②集め、お前たちの土地に③導き入れる。

「取る」・「集める」・「導き入れる」という一つ一つと、その流れは、まさに主イエス・キリストの福音に通じるものがあります。父なる神が主イエス・キリストを通じて、〈過去〉において「取り」、〈現在〉「集め」、そして〈将来〉「導き入れるであろう」というのが、神の大いなる救いの骨組みです。そして、この重要な骨組みは、37章の幻の出来事の中にも組み入れられています。

先に、エゼキエルが神からの託宣・御言葉によって聴いたことが、次には彼に、幻のかたちで見させられたのです。ここには、神の側から人を導いて、人に信仰をさずけられるという経緯が明瞭です。

エゼキエル書37:1-14に、①②③がそれぞれ確認されます。

①〈取る〉

主の霊によって「連れ出され、……降ろされた。」エゼキエル書37:1

空中浮揚（ふよう）するかのように、エゼキエルは主の手にとって捕らえられ、或る場所に降ろされました。

神が人を「取った」ということは、神が選んでくださった、召してくださった、愛してくださったということです。すでに信仰を持っている人の観点から言えば、

神がその人に洗礼の恵みをほどこされたということです。

②〈集める〉

「すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。」エゼキエル書37:10

バラバラだった骨がカタカタと音を立てて、近づき組み合わされました。あくまでも「カタカタ」というのは擬音（ぎおん）ですが、二度重ねて「音がした」・「震動した」（音を立てて）と記されています（エゼキエル書37:7）。礼拝共同体が回復・修復されていくときに、音が立つ・調べが鳴るとすれば、私たちは立ち直りに向けて励まされるのではないでしょうか。まさに、それは復興の足音です。音や震動が枯れた骨の谷に響いたという出来事は、聖霊降臨日に、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」（使徒言行録2:2）ことに通じています。

エゼキエル書の「幻」は「見る」というのが原意ですが、それは人が耳

で聴いて（びっくりして飛び上がって）分かるほどにリアルなものなのです。神は、私たちが一つになる・集められるとき、無音ではなく、音のしるしを備えてくださいます。その音が、讃美であり喜びの声であれば、どんなにすばらしいことでしょう。

まず、体が骸骨のごとく形となり、次に、霊が吹き込まれて、まことの人間となりました。詳しく見ると、このエゼキエル書と創世記2:7の人の創造の記事とでは異なる点があります。

形づくられ、霊が吹き入れられることは共通していますが、エゼキエル書では、人間の再創造とも言える奇跡において、エゼキエルが用いられています。神は、「霊よ、四方から吹き来たれ」（エゼキエル書37:9）という言葉を、彼に託しています。これはまさに、主イエス・キリストが弟子たちに、息・霊を吹きかけられたこと（ヨハネ20:22）の預言となっています。エゼキエルが見て、聞いて、語った「幻」を、父なる神の愛しておられる御子が実現してくださったのです。

「非常に大きな集団となった」という預言に、私たちは心くじけそうになるでしょうか。私たちの教会が小さな群れであることは、神がよくご存知です。神は私たちを見守られつつ、「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」(マタイ28:19) と命じておられます。生きていながら死んだも同然（Ｉテモテ5:6、ヨハネ黙示録3:1）だった捕囚民は「墓から引き上げ」られました（エゼキエル書37:12,13）。そこに、エルサレムに残る同信の友と自由に交流できるという希望が生まれました。

③〈導き入れる〉

「わたしはお前たちをイスラエルの地へ連れて行く。」

エゼキエル書37:12

「わたしはお前たちを自分の土地に住まわせる。」エゼキエル書37:14

「住まわせる」というのは特別の用語で、「**安住させる**」という意味です。キリストの福音との関連で言えば、天国において安らうことを表しています。

士師・サムソンは波瀾万丈の生涯を送りました。その最期、サムソンが建物の柱を壊すと、建物は崩れ落ちました。サムソンは圧死し、大勢のペリシテ人が巻き添えになりました。彼の兄弟たちは、サムソンの遺体を引き取り、父マノア（原意 **安住**・平安）の墓に葬りました。永遠の安らぎが、

壮絶な死を遂げたサムソンを包みました（士師記16:29-31）。

神は、弱く貧しい私たちを「取り」、忍耐強く「集め」、そして、私たちに目指すべきところを示し、そこへ「導き入れ」ようとされています。主の御力は、ずっと、世代から世代へと働き続けています。それが、エゼキエルの見た事の深意であり、神の救いの基本計画でした。

今、私たちの教会もまた、枯れた骨の谷の幻を「見る」ことが大切ではないでしょうか。幻の教科書である、枯れた骨の谷の幻とは、一体、何なのでしょう？

それは、教会が建て直されるという幻、または、礼拝共同体がどんなに崩れ落ちそうになっても、神が支えていてくださるという幻です。

恐らく、聖書に多様な幻が出て来るように、個人的なものから宇宙的なものに至るまで、さまざまな幻があることでしょう。しかし、さまざまな幻の根幹にあるのは、エゼキエルの見た、枯れた骨の谷の幻ではないでしょうか。

私たちが乞い求めるべき幻は、教会が日々に改革されるという幻です。教会が苦難を乗り越えて立ち上がり、さらには、ただ教会が一つになってここにとどまるのではなく世に遣わされ、隣人を愛する働きを広めていくという幻を、主によって見させていただけるならば、幸いです。

ヨハネ福音書20:22――

（イエスは）そう言ってから、彼ら（弟子たち）に息を吹きかけて言われた。

「聖霊を受けなさい。」

父なる神によって派遣された神の御子、イエス・キリストが、行為と言葉をもって、弟子たちの中に、霊を吹き込まれました。ここに、エゼキエルの見た幻が実現しました（エゼキエル書37:5-6,9-10）。

しかしながら、旧約における霊の注ぎと、弟子たちに主イエスが再会された場面でのそれとの違いを見逃してはなりません。今ここに、主イエス・キリストは、十字架につけられ、私たちの罪を贖って、復活されたお方として、立っておられます。主イエスは、どこまでも愛し抜く愛をもって、弟子たちの罪を赦すお方として、ご自身の内から聖霊の風を呼び起こされました。

聖霊は、常に主の御業と御言葉を、十字架と復活を、私たちに思い起こ

させます。言い換えれば、聖霊が、イエス・キリストが私たちの主であることを知らせ続けるのです。それはまた、エゼキエルの預言、「お前たちはわたしが主であることを知るようになる」（エゼキエル書37:6,13,14）ということの成就でした。イエスが主キリストであることを知らされた私たちは、世にある限り、神に栄光を帰すのです。

幻を抱くというのは、最も単純であり、最も基本的な私たちの信仰生活です。

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。
〈すると〉老人は夢を見、若者は幻を見る。

主イエス・キリストが弟子たちに霊を吹き込まれるところから、初代教会は設立されました。代々の教会は、思いもかけない〈すると〉の展開によって、困難を越え、伝道していきました。キリスト自らが働いてくださり、聖霊の助けを送り、罪や忌(い)まわしいことや自己嫌悪など（エゼキエル書36:31）から、私たちを救い出してくださいました。

ヨエル書3:1の通り、教会は、〈昼〉息子と娘が一致協力して、「預言する」こと、すなわち、御言葉によって宣教することを基軸としています。同時に教会は、〈夜〉老人が「夢を見」、若者が「幻を見る」ことによって神の御心を知らされています。私たちが起きている時も、眠っている時も、神は私たちを見張っていてくださいます。

老人の「夢」から若者の「幻」へと変移しているように、ちょっと違っているところに、主キリストの肢(えだ)の多様性が表されています。私たちの教会もまた、御言葉を聞き、語るという基軸が在る中で、老人と若者が集い、さまざまな賜物を分かち合えるよう祈りましょう。

茅ヶ崎香川教会月報
No.４３７
２０１６年１０月３０日発行
編集発行：日本キリスト教団
茅ケ崎香川教会
発行責任者：小河信一
編集責任者：鈴木隆二